



佳作

小学校最後の舞台で

佐藤 羽花

私ももちろん、主役をねらっている。

私はこの六年間、学習発表会でこれといって良い役になつた事はない。

だから、最後位は親にパツと華やかな姿をみてもらいたいのだ。

―そして、亡きひいおじいちゃんの為にも。

私のひいおじいちゃんは今年の七月、百才でその生涯に幕を下ろした。

きっと、私の事を天国で見守っていてくれると思う。

そんなひいおじいちゃんに、天国から私の活やくしているところをぜひ、みてもらいたい。

私はどうしても主役になりたかった。

家に帰ってお母さんに劇の事を話し、主役になりたいと言った。

お母さんは台本を見て、

「ふうん・・・でも主役になりたい人、たくさんいるでしょ？」

九月に入って間もなく、私たち六年生にとって、大イベントの一つである学習発表会の役決めの予定が入ってきた。

劇の台本が配られると、教室はわっと人の声でにぎわった。

何の役になりたい？と、友だちに問う者やこの役になりたい、と強く願う者。

みんななりたいたいは、それぞれだった。

今回の劇、『夢から醒めた夢』は女子が主役だ。

なので女子の場合は、半分位の女子が主役になりたいと思っただろう。

と、私に聞いた。

「え……まあ、うん。」

私が小さくうなずくと、お母さんはさらにまじまじと台本を見た。

「だってさ、なれる人、三人でしょ？前の劇で上手だった子、なっちゃうんじゃない？」「でも、なりたいんだもん！だって、小学校生活最後だよ？」

私が必死で言うとお母さんは、なりたいのになればいいじゃないの、と言ってリビングへ行ってしまった。

その後、私はひいおじいちゃんの息子である、私のおじいちゃんの家へ行った。

おばあちゃんが出むかえてくれて、私はひいおじいちゃんの祭壇へ行つて手をあわせた。

（ひいおじいちゃん、私、絶対主役になってみせる。だから、応えんしてね。）

私はそうお祈りして、おじいちゃんの家をあとにした。

家に帰って私はインターネットで『夢から醒めた夢』

を、調べてみた。

どうやらこの作品は、あの赤川次郎が原作で書いたもので、ミュージカルにもなっているものらしい。

内容は、私が簡潔にまとめたもので説明しようと思う。

では、始めるとする。

主人公ピコはお化け好きの女の子。

ある日、ピコが遊園地のお化け屋敷に入ったところ、中にはピコと同じ年位の女の子が、

名前はマコと言うらしく、非常に冷たい手をしている。る。

何て冷たい手をしているの？ピコが問うと、マコは自分の正体を全て明かした。

どうやらマコはもう、幽体らしい。つまり、死んでいるのだ。

マコは突然交通事故で亡くなってしまい、最愛の母へお別れを言えなかったのだった。

だから一日だけ入れかわり、母に最後のお別れを言

たいのだと言う。

心優しいピコは、一日だけなら、とこれを受け入れてしまう。

そしてピコがあの世界へ、マコがこの世へと行く事になった。

ピコがあの世界で冒険を終えようとしている頃、マコの母はマコとの二度の別れを惜しんでいた。

マコの説得で母は、涙しながらもマコと本当に最後の別れを交わした。

マコはピコに何度も礼を言い、ピコは現代に戻る事ができたのだった。

話は大体こんな感じで、ピコとマコの友情をえがいたものである。

まあ、マコも主演と同じなので、ピコがだめでも、主演はまだある（マコになれる人は二人）という事になる。

けど、マコをねらってる人も多いんだろうなー……。

でも私は、そんな事で退くまいと、決心した。

翌日、学校では劇の話題でにぎわっていた。

私は黙って本を読んでたけど、やっぱり、きき耳をたずにはいられなかった。

やっぱり、ピコとマコをねらってる人は多いみたいだ。

ピコとかマコとか、すごく盛んに聞こえてくる。

（はあ……。やっぱり多いんだな、主演になりたい人。）

オーディションまであと少し。

私は練習にはげむ事を決心した。

しかし、学校で発声練習はあえてしない。

家でこつこつ練習し、いざオーディションとなった時にみんなをびっくりさせてやるのだ。

私は家へ帰り、さっそく発声練習を行った。

声の限界まで声を張り上げる。

何度も何度も発声したら、のどがヒリヒリしてきた。

これを毎日するのか……。

大変だけど、私にとってそんなものは主役になる為ならちっとも『苦』じゃなかった。

次の日も、また次の日も、ずっと練習した。のどが痛いなんて言って、なまける事も、しなかった。

そしてオーディションの前日。

家におばあちゃんが来て、私に言った。

「明日、頑張れよ。どんな役になったっていいんだから。ばあちゃん、楽しみにしてるからねえ。」

「うん・・・！頑張って主役になるね。」

その日で発声練習は最後になった。

次の日、学校はそれはもう、すごいものだった。

朝っぱらから発声している者や、台本を見てぶつぶつぶやいている者。

友だちとセリフ合わせをしている者もいる。

みんな相当気合が入っているようだ。

そして、オーディションをやる六時間がやってきた。

「よし、じゃあ始めるぞー。」

担任の高橋先生が叫ぶ。

心臓がバクバク音を立てている。

汗がほおをつーと流れるのを感じた。

「じゃ、ピコやりたい人、前出て来て。」

やっぱり、ピコをやりたい人は一組も二組も多かった。

ピコとマコはソロの歌があるので、『アナと雪の女王』の『ありのまま』を歌う。

もちろん私は、きちんと歌も練習した。

自分の番が近くなってくると、さらに心臓がバクバク高鳴った。

(どうしよう、どうしよう・・・、もう少しで私の番だ・・・。)

足がガクガクふるえた。

「羽花ちゃん、大丈夫だよ。」

同じくピコ志望の友だちが、私の肩を叩いて言った。

「うん。」

私はこくっとうなずいた。

次は私の番だ。

大きく深呼吸する。

(平気平気。あんなに練習したんだもん。)

そしてー。

「次、羽花。どうぞ。」

私はその声を合図に歌い出した。

よしよし、順調だ。

しかしー。

サビの高い部分で、声がかすれてしまった。

(！ヤバッ！声、かすれた・・・!!)

きんちょうか、のどの痛みか・・・。

それでも、私は歌い続けた。

(練習を、水の泡にしてたまるもんか。)

「はい、いいよ、ストップ。」

高橋先生がストップと言ったら、歌をやめてセリフを

言いなさい、という合図だ。

セリフでは、先生は声の大きさ・セリフの速さ・気持

ちのこめぐあいを重視する。

私はもちろん、その三点をひたすら練習した。

セリフは、私にとっては完べきだ。

オーディションの為に、とても頑張ってきたのだから、無駄にしてたまるものか。

ら、無駄にしてたまるものか。

体育館中にひびき渡る位の大声かつ、心に染みる、気

持ちのこめぐあい。

(よっし、先生め、今に見てろ！)

気合は十分だ。

私はセリフを、練習した時以上の大きさで言い放っ

た。

自分の声がこだましているのがわかる。

高橋先生は一組の担任、本多先生と顔を見合わせてう

なずきあい、最後の者の歌、セリフを聞き終えると、

「次、マコやりたい人。」

と言った。

私はもちろん、マコのオーディションも受ける。

今回のオーディションはやりたい役全てのオーディ

ションを受ける事ができる。

マコ志望の人も歌を歌い、セリフを言う。

さあ、私の出番だ。

「あ……れ？」

セリフをド忘れして、頭の中が真っ白になった。

半分まで好調に言えていたのに、ラストパートの大

事な部分をド忘れしてしまったのだ。

……もう駄目だ。

私はその場に座りこんだ。

高橋先生はどんどん次の者、また次の者の歌、セリフ

を聞いてゆく。

私はその他も多数オーディションを受けたのだが。

結局、マコもピコも駄目だった。

家に帰ってじだんだをふみ、泣きじゃくった。

何もかも、成果として実らなかった。

期待されていたのに、その期待に――

こたえられなかった。

ごめんなさい、ひいおじいちゃん。

私の活やくを見せてあげられなくなった。

ごめんなさい、お母さん、お父さん。

二人の期待を、裏切ってしまった。

ごめんなさい、おじいちゃん、おばあちゃん。

六年生最後だからと楽しみにしていたのに、目立つ主

役になれなかった。

でも、私になった目立たない『配達人』という役を、

誰も変だとか目立たないだとか、せめたりはしなかつ

た。

私は考えた。

なんでこんな役なのに、みんな私の事をせめないのだ

ろうか。

六年生最後にして主役を盛り立てるだけの、華のない

役なのに。

私はお母さんにたずねた。

「私、こんなに目立たない役になったのに、このままで

いいの？私、ピコになれなかった。」

お母さんは、読んでいた雑誌を置き、私に優しく言っ

た。

「このままで、いい。ピコだかになれなくても、配達人は羽花のやらなきやいけない、大事な『役』なんだから。自分にあたえられた『役』をきちんとやってくれれば、それでいいよ。」

私はお父さんにも聞いてみた。

「私の役、どう思う？全然大した役じゃないよね。」

お父さんはそんな事ない、と言った。

「どんな劇も、わき役がいるから成り立つんだ。どんなに素晴らしい機械だって、ねじ一本なければつくれないだろう？だから劇だって、わき役がいるから一つの素晴らしい劇が出来るんだ。」

なるほど、私は六年間使ってきている自分の机を見つけた。

この机のねじが一本なければどうなってしまうのだろう。

ある一部分だけはただの木になってしまふ。

それでは机とは言えない。

私の座ってるイスだって、本を入れてあるたなだっ

て、数々の部品からできている。

そうか、主役を盛り立てる役がいるから、劇にいつそうみがきがかかるのか。

私は、それでも主役をあきらめきれなかったけど、自分の役に精一杯つくす事を決めた。

何日かして、劇の練習の予定が入ってきた。

つくづくピコの者がうらやましいと思ったけど、これも実力の成果だ。

悔しいけれども、仕方がない。

そんな未練がましくねちねちしても、何も始まらないのだし。

本番は着々と近づいてくる。

そう、あのオーディションの時のように。

衣装を着ての練習も始まった。

『配達人』の衣装は、ブラウスに、黒っぽいズボン、それと学校で用意された、マントとぼうし。

ほとんど黒だから、低学年にはよく『悪もの』に思われた。

(一応、ピコの味方なんだけど・・・)。

一応っていうよりガッツリ味方だ。

マコに会わせたのも『配達人』だし。

話は戻って劇は、とうとう体育館練習に突入した。

ほぼ毎日体育館練習で、劇はどんどん本格的になっていった。

本番まであと数日。

主役はもちろん、他の役の者達も、絶対成功させるという気合いが十分に入っていた。

そしてむかえた本番当日。

高橋先生はかわいい表情だった。

多分時間内に終われるかとか、誰かがセリフをド忘れしないかとか、色々な心配をしているのだろう。

私は全くきんちようなんてしなかった。

私はこの日の為に、やれる事は全てやった。

何の悔いもないし、何の迷いもない。

ただ舞台に立って、正々堂々と演技をすれば良い、ただそれだけのこと。

小学校生活最後の舞台を変えるのは自分自身であり、自らの頑張りしだいにある。

私はその大切さを、オーディションの時に実感した。

頑張れば頑張っただけ成果がでる。

私はオーディションの時は少々、頑張りが足りなかったのかもしれない。

保護者がぞろぞろとうかを歩き始めた頃、全員の衣装がえがすんでいた。

もうきんちようするヒマなんて、ない。

六年生は体育館へ向かった。

ずらりと保護者の方が並んでいる。

そして、六年生の出番がやってきた。

「続きましては、今年で最後となります、六年生の発表です。」

六年生の学級代表がしゃべり終わると、ブーと、ブ

ザーがなった。

劇が、スタートした。

私はまず、おどりがある。

ライトがまぶしくて親の顔は見えなかったけど、きつと見てるだろうと思って精一杯おどった。

さあ、次はセリフだ。

ステージから見える人の顔を見てみると、あのオーデイションの時を思い出す。

そうだ、これをオーデイションだと思えばいいんだ！

さすれば、とても大きな声が出せるかもしれない。

私はその時の悔しさもせて、パワーマックスの声でセリフを言った。

私的には完べきな出来ばえだった。

どの時よりも、一番大きな声でたかもしれない。

そして劇はどんどん進み、クライマックスになった。

みんなで歌を歌い、体育館を片づけて、みんな保護者と帰って行った。

私は、オーデイションの時から、この終わりまでをずっと脳でくり返していた。

私の物語は、伝記や旅行記などといった、素晴らしいものではない。

しかし、私に人間にとってかかせない、努力、人となりの協力の大切さ、そして、悔しさこそが次へのバネになる事を教えてくれた、最高で大切な物語なのである。